

## 「MSW という仕事～バイステックの 7 原則から再考する～⑦」

「猫屋敷で生活する M さん」～援助関係をつくる～

高名 祐美

介護保険制度がまだなかった頃。今から 30 年と少し前のことである。猫十数匹と不衛生な環境で生活する一家にかかわった。家族全員が病気を抱え、大黒柱だったクライアントが動けなくなった。社会資源は当時乏しく、家族の介護力不足は深刻だった。このままでよいはずがない。快適な環境で気持ちよく過ごし、必要な介護が受けられるようにと、自宅へ何度も訪問した。少しでも早く現状を変えたいと、自分の感情と価値観で援助をすすめていたように思う。当時の記憶をたどり、SW として未熟だった頃を振り返りたい。

M さん。男性。70 歳。脳梗塞で右片麻痺の状態。

家族は妻（63 歳 統合失調症で通院中）、長男（28 歳 慢性腎炎で通院中）の 3 人暮らし。

脳梗塞で入院していた 70 歳の M さん。退院した後に病棟 Ns から、「M さん、退院したけど少し気になる」と MSW の私に連絡があった。私は入院中の M さんとかかわりはなかった。M さんには右片麻痺があり、移動は車椅子だがつかまるところがあれば多少歩けるまでに回復していた。M さんの妻は夫が入院中に一度も面会に来

なかった。介護ができるのかは不明。息子は仕事をもって、車は運転しない。約 1 か月間の入院で、病棟と家族がほとんどかわりないままに退院となった。退院許可を伝えると、日曜日に息子がひとりで迎えに来て、タクシーで退院していった。妻が夫を介護できているかどうか気になるということだった。

その当時、脳卒中で入院した患者について、退院後に市町村へ報告するシステムがあった。M さんはそのシステムの対象者でもあった。私は、マニュアルに従って病棟 Ns の気になる点をふまえて、連絡票を市の担当者へ送付した。

数日後に市の担当者から私に電話が入った。「あの～、M さん宅を訪問してきてのですが。今までに訪問した中で最悪の環境ですごしていらっしゃいました・・・」と。「最悪の環境というのは？」と尋ねると、担当者は状況を説明してくれた。「まず、猫がたくさんいて。十数匹いると思います。外見は新しいこじんまりとした素敵なおうちなのですが。玄関・室内とところかまわず猫の糞尿があつて。その部屋の中で M さんはこたつに足をつっこんだ姿勢で寝ていました。日夜そうしてすごしておられるようでした。退院してきてからは歩いて

いないとのことでした。奥さんもいらしたのですが、同じようにこたつに横になっていました。こたつの上には、食べかけの食料がたくさん。ところせましと。いつのものかわからないようなものまで。排泄は尿器でしているようですが、寝ている枕元に尿器、その横にお薬がおいてあって。尿器でとったおしっこは奥さんがトイレで捨てているとのことでした。私が訪問中、猫が後ろをとびかかって。とても不衛生な状況でした。とにかく今までの中で最高でした。」

担当者の保健師は「最悪」「最高のひどさ」などの言葉を何度も繰り返した。病棟Nsの気になるところをはるかに超えて、相当劣悪な生活状況のようだ。妻に介護はできていなかった。薬もしっかり飲んでいないようだった。当時、当院では退院後の患者への継続看護として、老人保健法による訪問看護を実施していた。その仕組みを活用して、Mさんの療養生活を支援しようと私は考えた。訪問看護の利用をすすめよう、それにはまずMさんの生活状況を実際に把握しよう、そう考えて自宅訪問を計画した。Mさん宅に電話をいれると、妻が出て、病院からの訪問を承諾してくれた。

市の保健師、MSW、当院の保健師（訪問看護担当）と一緒にMさん宅を訪問した。近隣に家はなく、Mさんの家は広い敷地にポツンと建っていた。玄関の戸をあけると、さっそく猫が数匹飛び出してきた。悪臭が鼻をつく。外見は確かに新しい家だが、一歩玄関に踏み入れるとそこは想像を絶する世界だった。

（これはすごい・・・ 座る場所もない・・・）

SW：こんにちは、Mさん。病院から来ました。お加減いかがですか。

M：なんや！！ 病院がなにしにきた！用はない。

妻：父ちゃん、今日病院の人が来てくれるって、この前電話あったがいね。忘れたんかいね。

M：何の用や！

SW：退院してどうお過ごしですか。お薬は飲めていますか？ご都合の悪いこと、ありませんか？

M：なんともない。薬？ちゃんと飲んでるわ。

玄関入ってすぐの部屋にMさん夫婦はこたつで横になっていた。室内は物が乱雑におかれ、足の踏み場がない。Mさんの枕元に膝をついて、話始めたが、その後ろを数匹の猫が走り回る。こたつの中からも猫がでてくる。保健師から電話で聞いた状況が、現実目の前に繰り広げられていた。座って話をするスペースもない。寝たまま起き上がろうともしない、視線を合わせてもくれないMさんのそばで会話を続けようと試みた。

（小柄で度の強い眼鏡をかけた妻が申し訳なさそうに）

妻：すみませんね。この前は市の人やったね。今日は病院からですか？父ちゃん、歩かれんようになってしまって。私も体弱いものでなにもしてやれない。息子は仕事にいつて昼間はいません。でも、やさしい息子で、ちゃんとこうして私らの昼ご飯をおいていっ

てくれる。私が作れないから。薬は、息子が「飲まないとだめやぞ」ってそこに置いてくれてある。

M：なにをごちゃごちゃ言うてる！どこも悪いところはない。もう帰ってくれ。  
保健師：お薬、みせてもらいますか。それと血圧を測りましょう。

会話はすすまなかった。Mさんは私たちの訪問を歓迎してはいない。血圧はなんとか測らせてもらったが、それ以上のことは何もできない。悪臭、猫の糞尿、自分の排泄物の中でMさんは一日中寝ていた。なんとかMさんと関係をつくりたかった。

Mさんからは、何も訴えはない。妻は自分のできないことを伝えてくれた。息子さんはどう感じているのだろう。仕事があり、両親の介護や家事まで手が回らないのだろうか。妻から息子さんも通院中であることを聴き、受診日に面接を計画することにした。息子さんに連絡をとると、受診後の面接を約束してくれた。

約束の日。息子さん(Kさん)と私は相談室で向き合った。Kさんの衣服から、Mさん宅で感じた同じ臭いがした。毎日の暮らしぶりを尋ねた。退院してからMさんはこたつに寝たきりである。Mさんの妻は料理や掃除、買い物などできない。猫は自分が好きで飼っているが、だんだん増えて世話がおいつかない。Mさんが入院前は家事をしてくれていた。退院してからはすべて自分がやらなければならないようになった。仕事から帰ってくると疲れてなにもする気になれない。通勤や買い物、通院の交通手段は自転車で、職場までは30分の距離。隣近所との付き合いはほとんどなかった。

家族と外との境界は固く、Kさんに相談相手はいなかった。

Kさんには姉が一人いた。姉はMさんの前妻の子供で、現在は全く行き来していない。どこにいるのかも知らないと彼は語った。今の家は、それまで住んでいた家が台風で壊れ、同じ敷地内に父の退職金で建てたという。Kさんの部屋は2階だった。介護は全くと言っていいほどできていなかった。家事も不十分だった。Kさんには軽度の知的障害があるようだった。Kさんの負担を軽減し、快適な生活ができるように、訪問介護やベッド、ディサービスでの入浴などの利用を提案した。Kさんは「父親がうんといえれば利用してもよい」と。積極的ではなかったが、援助の申し出を受け入れてくれた。介護保険がなかった時代。ベッドは社会福祉協議会の無料貸し出しを利用、家事や介護は行政のヘルパーに、入浴はディサービスでと計画した。

ヘルパーの初回訪問に私は訪問看護師と同行した。ヘルパーは玄関で立ち尽くし、「なにをしたらいいのですか」と言いながら、玄関先でえづいていた。まずは掃除を提案したが、Mさん夫婦が寝ている状況では、居室の掃除ができない。ひとまず台所や洗面所、トイレの掃除と考えたが、あまりに汚れがひどく簡単にできる状況にはなかった。私たちがあれこれ相談している間、妻は全く動こうとしなかった。二人が寝ている部屋をきれいにしたいと伝えたが協力は得られない。

次にベッドを使うことを提案したが、Mさんは「そんなもんいらん!」。息子のKさんに了解をもらったと繰り返し説明し、なんとか搬入にこぎつけた。

ベッドの搬入は大変な仕事だった。ベッドを置くには、大掃除が必要だった。福祉用具業者、社協の職員、MSW、訪問看護師で筆箒をずらしたら、そこも猫の糞だらけだった。Mさんの拒否にあいながらも、なんとかベッドを設置した。しかし、そのベッドにMさんは移動してくれなかった。その日はあきらめたが、その後何度促してもベッドへは移動してくれなかった。ベッドは結局一度も使用されないまま、また猫の糞尿にまみれた。

「このままでいい」といい、こたつから出ようとしないう Mさん。「このままでいいはずがない」と思う私たち。ベッドの利用はあきらめ、次はディサービス利用につなげる作戦を立てた。「風呂に行く？行きたくない」「ほっておいてくれ」「とにかく一回行ってみましょう」と何度も何度も声掛けし、その都度罵声を浴びた。あきらめない私たちに、とうとうMさんは「なら、一回行ってみるか」。利用をしつづ承諾してくれた。

初めての利用日。Mさんを迎えにきたディサービスの職員も、家の状況をみて言葉を失った。大きな10数人乗りの送迎車にMさんひとりだった。ディサービスセンターでの入浴は最後で、保健師の付き添いが条件だった。Mさんをディサービスに送り出し、自宅に残った私とヘルパーは、Mさんの居室の掃除をする。入浴をすませてさっぱりした顔で帰ってきたMさんは、ご機嫌だった。「また行きますか」と誘うと、「おお、いくわ、風呂」と答えてくれた。単純に、とても嬉しかった。

2週間に1度、ディサービス利用に合わせて、訪問看護師・MSW・ヘルパー2名が

Mさん宅を訪問し、対応した。Mさんは、入浴を喜んだ。その顔を見ることは私たちの励みにはなった。しかし2週間後に訪問すると、家の中はまたもとの状態にもどっている。どうして2週間でこんなふうになるのだろう。そう思わずにはいられなかった。

そうした支援を継続していたが、Mさんの奥さんが脳梗塞を発症して入院となった。寝たきり状態になってしまい、奥さんは特別養護老人ホームへ入所した。その後Mさんにも体調の変化が現れ、入院することになった。直腸癌が見つかり、人工肛門造設状態になった。入院中にMさんと交わした会話である。

(Mさんは静かにベッドに臥床していた)  
SW：病院はどうですか。入院も長くなりましたね。

M：そうやな。仕方ないけどな。自分でできんことが多いからな。(おだやかな口調で)

SW：何回もお宅にお伺いしましたね、おそうじとかさせてもらいました。

M：おお、世話になったな。あの風呂はよかったなあ、また行きたいな。

Mさんのこの言葉に、出会いからそれまでの様々な場面を思い出し胸が熱くなった。Mさんと援助関係が築けたと感ずることができた。その後退院許可がでたが、息子のKさんにストーマ管理はできなかった。Mさんは、妻と同じ特別養護老人ホームへ入所することになった。ディサービスの風呂にもう入ることはなかった。

Mさんの自宅に何度訪問しただろうか。病院のSWとして、自宅への訪問回数は、最多である。事業所とぶつかることも多々あった。今ならばケアマネジャーや地域包括支援センターに支援を引き継いで終了していたかもしれない。しかし、当時は自宅へ出向くしかなかった。なんとかしたい、その思いが私のエネルギーになっていた。援助関係を築くまでの道のりは長かった。自分自身の価値観が強く影響していた。

Mさんの家やMさん、奥さん、Kさんの顔や表情、声を今でもよく覚えている。Mさん家族をシステムとして理解していたら、どんな支援をしていただろうか。当時の私は、問題の原因探しをしてなんとか解決しようと、目の前の状況しか見ていなかったように思う。Mさんのライフヒストリーを聴くこともなかった。

息子のKさんは、その後母・父の順で家族を失った。一人になったのち、転職して自宅を離れて生活をしていた。そのKさんから、「透析をうけなければならなくなった。どうしたらいいか」と一度電話で相談があった。現在受診している病院のMSWに相談するようにと伝えた。その後、Kさんが急死したことを主治医だった医師から聞いた。Mさん家族はみんな旅立ってしまった。Mさんは「K、少しくるのが早かったぞ」と声掛けしただろうか。今でも忘れられないMさん家族である。